

## うめくさ-1

## 「うめくさ」を始めるにあたり

付：「農業餘話」の「マウ」

昨年に配置換えとなって、専門が少し変わったのを潮時に植調誌のROM（読み手専門）になれるものと考えていたところ、同誌編集部から「コラムを書くように」との依頼を頂いた。ここでのコラムとは要するに埋め草である。「広辞苑（第三版）」には「埋草 ①攻城の際に、堀などを埋めるのに用いる草。太平記二十「堀溝をうめんために、十三万余荷を国中の人夫に持ち寄せ」 ②あいた所または欠けた部分を埋めるもの。雑誌などにできた空白を埋めるために用いる短文。③飼料用として穴蔵などに貯蔵しておく草。」とある。コラムの執筆も草にかかわる作業の一つであることがわかった。

ウメクサという標準和名の植物はないが、和歌山県でクワクサをウメグサ、高知県でコアカソをウメクサと呼ぶそう。この場合には「埋める」意味ではなく、葉の形が梅の葉に似ているからであろう。

「広辞苑」には採られていないが、「草を埋める」ことはかつての水田の手取り除草の基本であった。「改訂 農業原論（横井時敬：1911年版）」には、「挿秧後、十数日を経て、苗全く根付き、多少動揺すとも害なきに至らば、水を排し、雁爪を用ひて、株間を打起すべし。之を一番除草又は雁爪打と称す。爾後三四日間は、其俣となし置き、後再、水を濯ぎ田面を均すべし。之を雁爪直しと称し、手を以て行ふ。爾後穂孕み頃までは、数回除草を行ふべく、其際には常に水を落とし、手にて草を除く外、遅蘗を去り、且、害虫に注意して之を駆除すべし。除草の回数は、多きに利あれども、成熟期に臨みて、根を切るは、忌むべきことなるを以て、最

後の除草は、遅きに失せざるを要す。（以下略）」と、手取り除草の要点が記述されている。

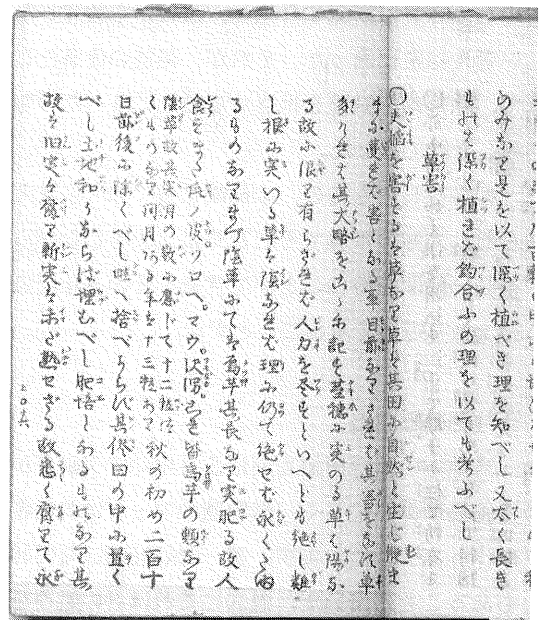
第二次世界大戦末期に、東京から福岡県の羽犬塚（現九州沖縄農研センター水田作研究部の所在地）に疎開して慣れない農業に従事した中尾定子さんの言葉を借りると、「草履のような平らな金具に長い木の柄がついているのを「がんづめ」といいます。それをおして田の表面の小さな草をとるのです。一盆前には是非本格的な草取をすまさねばなりません（中略）。中腰になって稲の周囲をさぐると小さな草が生えています。それをもぎとるようにして教わった通りに土の中にうずめます。きちんとかくしないと又生えてきてしまいます（中略）。田の草とりの辛さは身にしました。私は泥だらけになって田を這いながら、これでは天照大神の時代の農作業と変わらないのではないか、一寸も進歩していないのではないかと思います。（羽犬塚物語：1971）」となる。

「埋める」という田の草の防除を最初に記したのは、日本ではじめて「雑草」の語が使われた「農業餘話（小西篤好：1809脱稿，1828刊）」と思われ、クログワイ、オモダカ、ウリカワなど「烏芋（クワイ）の類」について、「・・・秋の初め二百十日前後に除くべし 畦へ捨べからづ 其俣田の中に置くべし 土地和かならば埋むべし 肥培となるものなり 其故は旧実は腐り新実は未だ熟せざる故悉く腐りて永く絶るなり（中略）初夏の頃には絶がたしといへども秋除けば残りなく絶るなり」と出ている。塊茎で増殖する多年生雑草を、貯蔵養分がなくなつて、かつ新塊茎のできる前に取つて、土中に埋める

という、実に合理的な事柄が今から200年ほど前にすでに知られていたわけで、その卓見には驚かされる。草取りの理論は江戸の文化・文政年間において「天照大神の時代の農作業」から格段に進歩したが、このことが昭和初期の中尾定子さんに理解されるまでには至らなかった。

ところで、「農業餘話」のこの部分は「また瓜の皮、ソロヘ、マウ」とあり(写真)、この「マウ」は農山漁村文化協会刊の「日本農書全集 第7巻 農稼業事、農業余話」の解説でも「未詳」となっていて、まだ実物がわかっていない。「瓜の皮、ソロヘ」はそれぞれウリカワとクログワイである。塊茎をつける水田雑草なので、「マウ」がミズガヤツリだと納まりがよいが、現在残っているカヤツリグサ類の方言名には「マスゲ、マイゲ」はあるものの、「マウ」系のものは見つからない。「マウ」を現代風に書くと「モウ」、または「モー」となると考えられるので、そうすると「藻」になる。「塊茎をつける藻」であるとする、これはヒルムシロであろう。ヒルムシロを「モ」だけで呼ぶことはなかったようだが、「ヒルモ、ビルモ」など語尾に「藻」のつく方言名は現在でも各地に残っている。ヒルムシロは、「農業餘話」よりさらに古い「百姓伝記(1682)」の「巻9 田耕作集」には、「ひるもと云う草、葉ちいさく、

つるながく、手のうちすべらかにして、水の内にてとりにくし、水をほしてとりたるがよし・・・・」と記されているから、江戸時代にはよく知られた難防除雑草であったことがわかる。「塊茎をつける藻」にはクロモもあって、時に水田に侵入して塊茎を生産するが、ヒルムシロには知名度で劣るように思う。「農業餘話」の「マウ」の正体をヒルムシロとする仮説を提示して、これに関する諸賢のご見解を期待したい。(も)



「マウ」という正体不明の水田雑草名(頁中央部)が出てくる「農業餘話」の「草害」部

21世紀版

# SHIBUYA INDEX できました。 —9th Edition— 2002年版

渋谷成美・ほか／編集 A4版 932頁 定価45,000円(税込)

1978年に第1版を発行して以来、簡便に使える農薬リストとして知られている本書の第9版。世界の農薬のほとんどを網羅し、一般名、商品名、コードナンバー、メーカー名、構造式、適用場面、特性を記載。単剤約3,500を構造別に整理し、関連化合物の検索も容易にできる。また、混合剤で約5,000種も掲載。

全国農村教育協会

〒110-0016 東京都台東区台東1-26-6 (植調会館) 電話/03-3833-1821 FAX/03-3833-1665